

短歌的 日常

29

■ 昭和の青春——齋藤 史

関川夏央

春を断る白い弾道に飛び乗って手など振
つたがつひにかへらぬ

濁流だ濁流だと叫び流れゆく末は泥土か
夜明けか知らぬ

暴力のかくうつくしき世に住みてひねも
すうたふわが子守うた

一九三六（昭和十二）年、齋藤史の歌である。このとき齋藤史は二十七歳であった。

「二月廿六日、事あり。友等、父、その事に
関る」と詞書にある。

史は前川佐美雄、石川信雄らと「短歌作品」を創刊した一九三一年初夏、二十二歳で医師と結婚した。五年後、「二・二六事件」直後の五月、長女章子を出産した。入院中の史を見舞った父齋藤瀧予備役陸軍少将は、史が退院して帰宅したとき、すでに反乱幫助の罪名をもって衛戍刑務所に拘置されていた。

二・二六事件には史の小学校の同級生、栗原安秀中尉が主導的な役割をになって参加していた。青年将校のひとり坂井直中尉も、齋藤瀧の旭川第七師団勤務時代、軍人の子弟のみが入学する北鎮小学校の下級生であった。ふたりの共通の友人である中橋基明中尉は、よく齋藤家に遊びにきていた。

そのうえ坂井直は、史の夫堯夫の姪平田孝子と結婚していた。坂井は、これで史と親戚になれると喜んだが、その結婚は三六年二月

九日、歩兵第三連隊前の麻布龍土町における結婚生活は十五日しかつづかなかつた。歩兵第三連隊の安藤輝三大尉は秩父宮と親密な關係を保っていたが、坂井中尉は秩父宮との連絡將校となり、二月二十六日の蹶起にあたっては下士官兵二百名を率いて四谷仲町の齋藤邸に踏み込み、齋藤実内大臣を殺害した。坂井直は事の成功を信じたからこそ、すでに計画の進行していた段階での結婚を選んだのである。

三島由紀夫は中橋基明を「驕児」と形容した。將校用マンントの裏地を緋色にして、「これで返り血が目立たずに済む」とうそぶく中橋には、たしかにそういう面があった。だがその素顔はもの静かな青年であつた。史は、中橋がその柔和な外貌にもかかわらず、あるいはその柔和さの裏に秘められた繊細さゆえに、しだいに何ごとかにとらわれていく不安を感じた。

中橋中尉は三六年二月二十五日夜、四谷大木戸の芸妓を訪ねた。芸妓と彼は恋愛關係にあつた。しかし当夜、彼女は耳鼻科で手術を受けてたまたま一泊だけの入院をして不在だつた。中橋中尉は近衛歩兵第三連隊の宿舎に降る雪の中を帰つた。数時間後、彼は下士官兵百二十名とともに赤坂表町の高橋是清蔵相私邸を襲つた。「天誅！」と叫んで高橋是清に向けてピストルを撃ち、軍刀で切りつけた

のは中橋中尉自身であつた。

奉勅命令とは何なりし伝はらず 途中に消えて責任者無し
知らざるうちに叛乱の名を負はされるし
わが皇軍の蹶起部隊は

栗原安秀は幼い頃、史を男友だちのように「史公」と呼んだ。史の両親に対しては「おじさん」「おばさん」であつた。一方、史は栗原を女の子のように「クリコ」と呼び、齋藤もその呼びかたに親しんだ。

齋藤瀧が三重県津の連隊に転任すると栗原の父も四日市に転任となり、交流はつづいた。その後、齋藤家は福岡県小倉に転じ、史はその地で高等女学校を卒業した。一九二八年、予備役となつた齋藤瀧は一家を引き連れて東京に出た。居を定めた渋谷では、近くにこれも退役した栗原一家が住み、「クリコ」はすでに士官学校を卒業、少尉に任官していた。

史は「資本論」を持っていた。左傾化したのではない。それが当時の青年のスタイルであつた。栗原は一瞬意外そうな顔をしたが咎めることなく、自分も熱心に左翼の本を読みはじめた。部下の兵隊に尖鋭な左翼がおり、その思想を知らないでは論破もできないと考へたのである。栗原は日曜日ごとに自分の家に帰るように遊びにきた。彼らは姉弟あるいは兄妹のようであつたが、史が結婚すると、

やがて栗原も結婚した。



三二年から東北地方を中心に冷害が見舞つた。政府は三〇年はじめ金輸出を解禁していたが、第一次大戦後にそれを実行したのは日本だけであつたため、著しい勢いで金が流出した。たまりかねて三一年十二月、金輸出を再禁止し、銀行券の金兌換を停止すると日本は猛烈なデフレに見舞われた。おりしも世界大不況のさなかであつたので打撃は倍加した。三四年は大凶作の年で、長野県では藪の値が二六年の五分の一に下がつた。米は半値となつた。農村の困窮ぶりはただならず、娘の身売りが流行した。政治への不信と財閥への憎悪は民間につのつた。栗原安秀らの行動は、そのような空気によって促された。

三六年二月二十六日早朝、栗原安秀中尉は下士官兵三百名を指揮して首相官邸に突入した。彼らは岡田啓介首相を殺害したつもりであつたが、身がわりとなつたのは松尾傳蔵大佐であつた。岡田首相は押し入れにひそんで無事であつた。

そのあとすぐに栗原安秀は、齋藤瀧に電話をかけ、蹶起をつたえた。

「おじさん。すみやかに出馬軍上層部に折衝し、事態收拾に努力して下さい」

瀧は軍服を着て首相官邸へ出掛けた。栗原にいわれたように外套の襟の内側に使用済み郵便切手を貼りつけた。それを見せて哨所を通過した。首相官邸にいた蹶起軍は歩兵第一連隊の部隊であった。瀧は兵士たちが冬外套を着ていないことに気づき、不憚に思った。食事はしたかと尋ねると、まだでありますと兵のひとりが答えた。このとき瀧が兵らに「苦勞、苦勞」といったことが、のちに反乱幫助の罪状のひとつに数えられた。

蹶起軍は歩一、歩三、近歩三の各連隊を中心に約千四百名、参加現役将校は大尉を最高位に二十一名、ほかに過激思想を咎められて退役した元将校が二名いた。首相官邸、齋藤内大臣私邸、高橋蔵相私邸のほか、彼らは鈴木貫太郎侍従長官邸、渡辺錠太郎教育総監私邸、湯河原の牧野伸顕伯爵別邸を襲っていた。鈴木貫太郎は重傷、渡辺錠太郎は即死、牧野伸顕は脱出して無事であった。静岡県興津にある西園寺公望公爵別邸も襲撃目標であったが、これは計画自体が挫折した。事件の犠牲となったのは六名、負傷者は九名であった。

首相官邸で栗原安秀に会った瀧は、それから陸軍大臣官邸に向かい、川島陸軍大臣に会った。蹶起軍を義軍として認知して事態の収束を望む、というのが瀧の説得するところで

あったが、海軍出身の岡田啓介（即死と信じられていた）、斎藤実を殺害された海軍は憤激し、そしてなによりも青年将校たちが「恋着」していた昭和天皇の態度が不明であった。そのとき青年将校たちの殺害目標のひとりであった石原莞爾大佐が入ってきた。石原莞爾は青年将校の肩を持つ瀧を憎んでおり、「なんだ、予備の齋藤少将が……」と吐き捨てるようにいった。

瀧は、「予備の齋藤だが、動員令があれば現役の大佐の長官ともなる。罵倒はやめられよ」と答えた。

二月二十六日午後三時半、陸軍大臣告示が布達された。告示中にはつぎのような項目があった。

「一、蹶起の趣旨に就ては天聴に達せられあり／＼、諸子の行動は国体顕現の至情に基くものと認む」

この告示は陸軍大臣官邸占拠中の香田清貞大尉、村中孝次元大尉、磯部浅一元一等主計らに直接しめされた。彼らは互いに見かわして微笑した。成功を確信したのである。告示で蹶起軍は第一師団麹町区警備隊長の指揮下に入った。公的に認知されたということである。事実、食糧も原隊から届けられた。

陸軍大臣告示から十二時間後の二十七日午前三時半、東京市全域に戒厳令が布かれた。その日も瀧は首相官邸へ行った。栗原は、蹶

起部隊が戒厳軍司令官隷下に入れるよう交渉してもらえないか、そうすれば昭和維新は成就するのだが、と瀧にいった。しかし事態は流動した。重臣を殺害された昭和天皇は蹶起軍に対して好意的ではなかった。青年将校らもとめた「勅使差遣」が峻拒されたのはもちろん、「自殺するなら勝手に自殺させよ」という天皇の発言が漏れ伝えられた。

「私は二十七日夜から以後、家に引き籠って外に出ぬ事にした。」

電話が頻りにかかって来た

「中には軍方面の諜報機関からではないかと疑われるものもあった。又誰かに窃み聞きされて居る如き感も抱かされた」(二・二六) 齋藤瀧

盗聴の事実が明らかになり、その録音盤が公開されたのは、事件から四十四年を経た一九八〇年であった。首相官邸の栗原中尉のもとにも北一輝から「金はいらぬか」という電話がかかったが、これは二七電話であった。

二十八日早朝、奉勅命令が下達された。昭和天皇は「軍ができないというのなら自ら出馬して鎮圧にあたる」とあくまで強硬であった。その意を体して午後十一時「叛乱部隊討伐」の命令を戒厳軍指令部は発した。この瞬間、青年将校は「叛徒」となった。蹶起部隊は「叛乱軍」となった。

その夜、栗原安秀から最後の電話があった。

「栗原です。……長い事お世話になり御迷惑をかけましたが、これでお詫れします。」

「……おばさま、史子さんにもよろしく」

と言う。私は思わず震えた。……自決……と直感したからである（同前）



二十九日、事件は終わった。戒厳指令部は蹶起部隊の下士官兵に対し、ラジオ、アドバロン、飛行機、戦車を使って「原隊復帰」を呼びかけた。将校中では野中四郎大尉が自決した。安藤輝三大尉は二度試みたが部下に制止されて果たせなかった。湯河原牧野伯別邸襲撃で負傷し、熱海衛戍病院に入院中の河野寿航空兵大尉は三月五日、自決した。

栗原安秀は死ななかった。他の将校たちとともに、公の場で自分たちの趣意を訴えようとした。しかし四月二十八日開廷の軍法会議は一審のみ、弁護人なしの非公開であった。七月五日、青年将校十三名、免官軍人二名、民間人四名に死刑判決が下された。

栗原安秀らの刑は三六年七月十二日に執行された。場所は陸軍代々木刑務所、現在のNHK放送センター脇である。刑架は十字形、正座して緊縛されて、十メートル先の銃座に

正対した。顔の前に垂らされた白い布には、額の部分に照準用黒点がしるされていた。

午前七時ちょうど、栗原安秀、香田清貞、安藤輝三ら将校五名が処刑された。七時五十四分、坂井直、中橋基明ら将校五名が、八時半ちょうどに洪川善助、水上源一、ふたりの民間人と将校三名が処刑された。軍は演習用空砲をしきりに放って実弾射撃の音を隠そうとしたが、そのとき衛戍刑務所の独房にいた齋藤瀏は、たしかに「天皇陛下万歳」の叫び声を聞いた。元軍人の磯部浅一、村中孝次、民間人の西田税、北一輝、四人の死刑判決は翌三七年八月十四日、執行は八月十九日であった。

「古ヨリ狡兎氏而走狗京、吾人ハ即チ走狗與」
栗原安秀は獄中遺書に以上のように書いた。また、彼の親族宛遺書はつぎのようであった。

「一、葬式の事／堂々盛大に葬式被下度、肩身狭き思ひにてなさるれば怨みに存候」
「呉々も飯の肉体の亡失を何時までも嘆き被下間敷く、小生は各々様と共に罷在り候」
「小生、莞爾として同志と共に護国の鬼となる 呵々大笑」

七月二十五日は栗原の「二七日」であった。その日、栗原夫人玉枝は自殺をはかったが果たせなかった。中橋の恋人であった芸妓は、髪を切り、日本髪を結えなくした。坂井夫人

孝子は四一年十二月、陸軍少佐と結婚した。少佐は坂井らとおなじ心情の持ち主であった。坂井との結婚の届けは出されていなかった。彼女が未亡人ではなく、また正式にはそれが初婚であった。しかし夫は四四年九月、ビルマで戦死した。

禁固五年の刑を受けた齋藤瀏が仮出所したのは、三八年九月であった。すべての位階、恩給を剥奪された齋藤瀏の暮らしを支えたのは、手記「獄中の記」の印税であった。この本は四〇年暮れに出版され、翌四一年九月までに七十一刷を数えた。

額の真中に弾丸をうけたるおもかけの立居に憑きて夏のおどろや

これは齋藤史の第一歌集「魚歌」（一九四〇年）から採った。しかし、彼女には生涯、二・二六事件の影がさしつづけた。昭和初年の美貌の女性は、栗原安秀らの記憶をついに褪せさせぬまま戦争と戦後を生きて老いた。

かごめかごめ屈めと言はれ育ち来し籠の輪の中 狭し 島国
革命を持たざる国に生れ来て風雨ほどほどに有りて終るか

死の側より照明せばことにかがやきてひたくれなるの生ならずやも

（せきかわ・なつお 作家）

短歌的 日常

30

■ 昭和の青春(2)——齋藤史 ■

関川夏央

疲労つもりで引出ししヘルベスなりといふ八十年生きれば そりやああなた
おいとまをいただきますと戸をしめて出てゆくやうにゆかぬなり生は
携帯電話持たず終らむ死んでからまで便利に呼び出されてたまるか

齋藤史ふさは一九七七（昭和五十二）年には六十八歳になっていた。前年刊行した第八歌集『ひたくれなる』がこの年、追空賞を受け、『齋藤史全歌集』（解題・塚本邦雄）を出した。その六年前にあたる七一年、母キクが緑内障のため両眼失明した。七三年には、まだ六十七歳、医師であった夫・堯夫たかおが脳血栓のうりっせんで倒れた。堯夫は七六年に死に、キクは七九年九十一歳で老耄ろうちやうの果てに死んだ。この間の八年間、史は介護に明け暮れた。ことに七三年から七六年までの三年半は、病む夫と「人間以下のえたいの知れぬものとなりゆく」老母の介護に困憊こんぱいのきわみの日々をすごした。

声も姿も母ならぬものとなりはてし老の
無明の底辺そこべ知らずも
ぬばたまの黒羽蜻蛉あきつは水の上母に見えねば告ぐることなし

齋藤史は、老境を迎えて再びはなやいだ。八六年、七十七歳のとき『涉わたりかゆかむ』で読売文学賞を、昭和が終わった八九年には若

山牧水賞を受けた。九三年、八十四歳で芸術院会員となり、九四年には「秋・天瑠璃」で斎藤茂吉短歌文学賞、詩歌文学館賞を受賞し、九七年、八十八歳になる年、宮中歌会始の召人となった。同年、二度目の「齋藤史全歌集」(解題・岡井隆)を刊行、これは現代短歌大賞と紫式部文学賞を受けた。

若き「明治」はたのしかりしや 袖ひろ
げ土用干せる母の紋服

齋藤史は一九二六(大正十五)年、若山牧水にすすめられて作歌をはじめた。佐佐木信綱門下であったにもかかわらず、父、瀏は一度も娘に短歌をつくれとはいわなかった。二六年秋、牧水は当地の師団参謀長であった瀏を頼って喜志子夫人とともに旭川に来た。旅先で色紙、短冊、半截を売り、歌誌発行でつくった借金の返済にあてるつもりであった。すでに酒の気の断てなくなっていた牧水だが、お茶に見せかけた土瓶の酒をくみながら、揮毫に講演に精一杯つとめた。その一日、牧水は、小倉高女を卒業して旭川に帰って間もない十七歳の史を散歩に誘い、こういった。

「史子さん、歌をずっとやるつもりは無いんですか、——それはいかん。あなたが歌をやらないうというのは、いかん」

史が短歌史上に残る企画「新風十人」のひとりとなり、ほぼ同時に第一歌集「魚歌」を

出したのは十四年後の一九四〇(昭和十五)年、三十一歳のときであった。この十四年間のうちに「昭和」は激動した。齋藤史は、その荒ぶる波濤に洗われる青春を持った。



藍格子身をとりにかこむゆかた着てみつ
からに禁忌多き夏来る

三島由紀夫はこの時代を「豊饒の海」四部作の第二部「奔馬」でえがいた。齋藤史を「豊饒の海」のヒロイン聡子に擬する説は一時、中井英夫が高唱したが、それは根拠のないことだ、と八十五歳の史の語りの聞き手となって「ひたくれなるの人生」を編んだ樋口覚が否定している。が、「奔馬」に出てくる横子は、明らかに史を意識している。

「奔馬」の時制は一九三二年と三三年である。白山上に住む鬼頭中将は憂国青年たちを撫育する軍人であり、歌人でもある。その娘で実家に帰ってきた横子もまた歌をつくる女性だ。

「夏のさなかに、持ち前の氷室のような肌の白さが、漆黒の耳かくしと紺の襟元で縁取っている香かな風景のような沈静な顔を浮き上らせていた」と形容される彼女は、一方で、主人公である歳下の青年・飯沼勲の財界人暗

殺計画に同調して、「悪い血は瀉血したらいいんだわ。それでお国の病気が治るかもしれない。勇気のない人たちは、重い病気にかかったお国のまわりを、ただうろろうろしているだけなのね。このままではお国が死んでしまわう」と激語を吐いたりもするのである。

十九歳の飯沼勲をリーダーとする憂国の青年たちは、世の歪みを正すためテロを行おうとしている。彼らは麻布の歩兵三連隊所属、洞院宮治典王と親しい堀中尉と連絡がある。計画はこのようだ。治安攪乱のため、まず市内の変電所を爆破し、夜陰に乗じて金融界の巨魁三名を暗殺する。つぎに日本銀行を占拠してこれに放火し、払暁までに宮城前に参集、切腹自刃する。決行は昭和七年十二月三日とされた。堀中尉のモデルは安藤輝三大尉、洞院宮は秩父宮である。横子の年齢は特定されないが、齋藤史はこの昭和七年には二十三歳、結婚したその年である。

しかし彼らは蹶起前々日、根こそぎ逮捕される。取監された勲に横子の手紙が届く。

「もちろんあらわな言葉は使われていなかったけれども、勲に対する渝らぬ心持に溢れ、父に添削してもらったという歌の二三首が必ず添えられていた」(「奔馬」)

第一審の判決がくだったのは一年後、昭和八年の暮れであった。罪状は殺人予備、情状によって刑は免除された。勲が望んだのでは

ないが、横子の証言が働いた。

出獄した勲に年長の友が、密告したのは横子だと告げた。別れを告げに行った勲から横子は決行の日を聞き出し、友人の師につたえたのである。師は警察に報知した。

横子は勲の命を救うためにそうしたのだが、同時に彼女は勲の入獄を喜んだはずだ、と友はいうのである。

「惚れた男をたとえ手許に置きなくても、男に会えないという無限の苦しみに耐え抜いても、彼を自分一人のための男にしてしまいたい」、だから勲を「男が決して浮気のできない場所、女にとって一番安心できる場所」牢屋に送りこむべくしむけた。横子が前の結婚に破れたのも、その過剰な独占欲ゆえであった。数日後、飯沼勲は熱海へ行った。伊豆山の別荘で、暗殺目標のひとりであった財界人を刺殺した。そうして直後、相模湾を見おろす崖で割腹した。

「正に刀を腹へ突き立てた瞬間、日輪は險の裏に赫奕と昇った」(「奔馬」)

白きうさぎ雪の山より出でて来て殺されれば眼を開き居り

葎麻のごとき神経を刈りはらひ汗したれば・青き千曲川

けだものの肌を陽当るごとくしてこの枯山の黄なるしづげさ

四五年三月、齋藤史は家族父母ともども長野に疎開した。そこには美しい風景がひろがっていた。だが、軍人の子弟たちのなかで育ち、長じては東京という大都会しか知らなかつた史にとって、即物的でいて濃厚な地方の人間関係のありかたは恐怖に近い驚きだった。

それでも、夫が当地の病院に職を得たため、戦後も長野にとどまった。五三年、官舎から新築した家に移り、再び同居しはじめた直後、齋藤史は死んだ。七十四歳であった。

史の晩年は不遇であった。それは、軍上層部に済南事件の責任をとらされての早すぎる予備役編入と二・二六事件に連座した下獄のみによらなかつた。戦時中、太田水穂、吉植庄亮とかたらい、率先して国策団体「大日本歌人協会」設立のために動いたことで強烈な非難の嵐にさらされたのである。敗戦前から史には歌壇に身の置きどころはなかつた。

齋藤史は、父のためにこう弁明している。戦時言論統制が一段ときびしさを増したとき、歌人でさえ留置收容する動きがあった。その秘密名簿を見る機会があった史は、強権が発動される前に先手を打って「歌人一致して国に協力」の姿勢を見せ、難を避けようとしたのである。

「果して、史はさんざんの立場になりました。御自分が第一番にマークされているとも知らぬ当人が、史を激しく面罵し、大家は怒りを

あびせ、会は騒然となり、以後、父は、歌人からも孤立したかたちになりました」

「あるとき、ポツリとつぶやいたことがありました。―歌人てのは、正直すぎて、芝居気も解らないねえ―」(「おやじとわたし」)

二・二六事件余談(齋藤史)
史晩年の歌を一首だけ引く。

明治大正昭和三代を夢とせば楽しき夢か
わが見たりけり
齋藤 史



昭和も終わりがけた頃、齋藤史は昭和天皇と対面したことがある。園遊会であったか。

昭和天皇は人々と短く言葉をかわしながらゆっくり近づき、ついに目前に達した。彼女が会釈して「齋藤でございます」と自己紹介すると、天皇は間髪を入れず、「あ、史ね」といった。まるで齋藤史と会うことを予期し、言葉まで用意してきたかのようであった。

「自己流論としても解することのできる、敗戦後の信州での生活。疎開につづくものだが、そして生活上の要因によるものであるうが、文学者の身の処し方としては、群を抜いたあざやかさであり、いさぎよい」

岡井隆は史についてこのように書いた

〔短歌朝日〕○一年七・八月号。

「ここで一言作風にもふれていえば、史の歌は、従来、男性的といわれて来た作風にちがいののである。男女を、こういう形容で分けるのは、今では許されないのだが、それをあえていえば、剛毅であり、めめしいところが無い」

ついで岡井隆は、私がこの稿の冒頭に引いたような史の老境の歌を例にとつて、「現代短歌の口語化の一つの頂点に立つ歌」と評し、史の歌の「わかりやすさ」の対極にあるのが葛原妙子や森岡貞香の歌だ、といった。

しかし、その先を岡井隆はこのようにつづけた。

「長い間に、史のわかりやすさに慣れしして来て来たわたしは、ひよつとすると、あのわかりやすさは、見せかけのものではないかと思ふようになって来たのだ。あの奥には、くるぐるとわだかまる難解な人の世、人の性というものがあるのではないか」

「それは、これもわたしの愛読する妙子や貞香のもっている、表面上のわかりにくさ、謎と、いわば、うらがえしの間柄に立つものではないのか」

たそがれの鼻唄よりも薔薇よりも悪事やさしく身に華やぎぬ

夕霧は捲毛のやうにほぐれ来てえにしだ
の藪も馬もかなはぬ

定住の家をもたねば朝に夜にシシリイ
の薔薇やマジョルカの花

齋藤史の活動の最初期、第一歌集「魚歌」その前半部には、こんな「わかりにくい」歌が並ぶ。しかしそれは、美しいイメージを喚起する、力量ある「わかりにくさ」である。華麗さの風姿をたまちながらひたひたと破滅へ向かつて歩む「昭和戦前」の緊張感がここにはある。そんな、長く屈曲した歴史を歩いた道程の果てに到達した晩年の歌の「わかりやすさ」なのである。

齋藤史は、一九三六年の栗原安秀らのほげしい死と、刻々と迫る自らの静かな死とのあわいを六十余年生きた。その間、彼女の脳裡から二月の雪と七月の銃声は、ついに去らなかつた。

風翻翻 はるか虚空にうたふらし わ
がみづうみのはつか彩ふは

かなしみの遠景に今も雪降るに鏝下げ
てゆくわが夏帽子

死の側より照明せばことにかがやきて
ひたくれなるの生ならずやも

齋藤史は二〇〇二年四月二十六日に瞑目した。九十三歳であつた。

それより六年前の九七年は平成九年である。その正月、宮中歌会始の召人は齋藤史であつた。

た。召人は毎年ひとりだけ呼ばれ、御題によつて歌を詠むのである。御題は「姿」であつた。史はかくのごとく詠んだ。

野の中になすがた豊けき一樹あり風も月
日も枝に抱きて

セレモニーが終われば召人と五人の選者は隣室に移る。天皇と皇后がそこでねぎらひの言葉をかけるのは毎年のしきたりである。

岡井隆は選者のひとりであつた。

（侍従の紹介の言葉のあとで、まづ、召人に向かつて、ねぎらひのお言葉があつたのち「あの歌は、どこでどういふ氣持で作られたのですか」と陛下がお訊ねになる。それに史は、りんと聲を張つて、なにかと答へてあらつしやる。わたしは、このお二人の問答を、ちよつとはなれた所からききながら、「うむ。これは天皇家との長いいきさつの、いはば和解の風景なのかも知れない」と思つて、あとになつてから、そんな感想を、選者の一人である武川忠二に、語つたものであつた）

岡井隆があえて旧仮名遣いでこう記したのは、おなじ九七年五月に刊行された二度目の『齋藤史全歌集』その「解題」であつた。もしそれが和解なら、「昭和の青春」が、硬くしこつた悲しみを解くには、六十一年の歳月を要したのである。

（せきかわ・なつお 作家）